

昭和三十七年一月、松坂忠則の『國語國字論争』が出版された。カナモジ論者の松坂は「漢字は、文字一般の進化の法則のとおりに表示文字から表音文字に變わろうとしてきた」「漢字の大部分を占める『形聲』は、中國語のための文字としてはかなり便利な構成になつてゐるが、日本語（ヤマトコトバ）には縁のない構成のものである」「日本では、ごく未開の時代に、大陸から新しい文化とともに漢字を輸入した。その結果、知識が特權階級の條件となり、漢字は特權を守る役目になつた」と明治初期の見當外れの認識に固執してゐる。漢字全廢を目指す者として怪しむに足らぬが、許しがたいのは、明治四十一年の臨時假名遣調査委員會に言及して「『軍の意向』によつて、改正案がほうむり去られた。軍の意向をうしろだてにして反對論を唱えたのは、森鷗外であつた」と鷗外を誹謗してゐることである。虚偽であることは本書の二九二頁『國語問題論争史』の項を見れば明かであり、松坂の本の「おわりに」にある「自説につごうのよいように事實をまげて紹介するのは、もっとも悪い」といふ一節を以て應へるしかない。また松坂は「現代かなづかい」に反對して歴史的假名遣を守らうとする「いちばん大きな原因となつてゐると思われれるのは、使ひなれた表記法だから離れがたいという『慣習』の力である」と述べてゐるが、そのやうな個人的思はくで歴史的假名遣を守らうとしてゐるのではあるまい。不合理な「現代かなづかい」が正常な言語感覺を麻痺させ、日本文化の繼承發展を妨げ文化の質を低下させるからではないか。